

J1-A

二〇二一年度 入学試験問題
一般第一回・帰国児童入試

国語

注意

- 1 問題は 一・二 の二題あります。
- 2 試験時間は五〇分です。
- 3 答はすべて解答用紙に記入し、解答用紙だけを提出してください。
- 4 受験番号は算用数字で記入してください。
- 5 声を出して読むはいけません。
- 6 試験場の先生の指示があるまで、問題用紙を開いてはいけません。

— 次の文章は、筆者が中学生から高校生を対象に行った五回の課外授業のうち、五回目の内容をまとめたものです。これを読んで、後の問に答えなさい。

メディア・テクノロジーと文化産業が発達することによって、人びとの頭のなかには、大量の情報やイメージが送り込まれるようになった。僕たちはいまでは、どうやって情報を得ようか、ということよりも、どうやってたくさん情報の中から大事なものを、必要なものを選ぶか、ということに悩まされているよね。テレビにしろネットにしろ、広告にしろゲームにしろ、僕たちにイメージを送るメディアは、いつも僕たちを取り巻いている。

第2回で話したことを思い出してほしいんだけど、メディアが人びとの欲望をつくるようになると、消費者にはどんな問題が生じたんだっけ？——そう、人びとは①。メディアがどんな欲しものを教えてくれるから、自分が本当に欲しいものがわからなくなったんだ。ただ、情報が与えられ、大量のイメージが与えられることによって失われるものは、欲望だけじゃない。それは、人間が自分でイメージをつくる力、つまり、「想像力」をも奪ってしまうんだ。

『広辞苑(第五版)』には「想像」の定義がこう書かれている。

そうぞう【想像】サウザウ

①「韓非子(解老篇)」実際に経験していないことを、こうではないかとおしはかること。「一を逞しくする」

②(imagination) 現前の知覚に与えられていない物事の心像(イメージ)を心に浮べること。

①は漢文のなかでの用法にもとづいた漢語としての定義で、②は対応する英語からの定義だ。どちらも重要な定義だけど、まず②に注目すると、「心像(イメージ)」を心に浮べる」とある。みんなは英語を勉強しているから、「image/imagine/imagination」という英語の単語と、「像/想像する/想像力」という日

本語との対応から考えてもらってもいい。想像力とは、イメージ(像)をつくりあげる力なんだね。

「現前の知覚に与えられていない物事の心像(イメージ)を心に浮べる」能力は、人間に昔から備わっていたものだ。そして、そのような「心像(イメージ)」を目に見えるものにしよう、五官で感じ取れるようにしようというのは、人類にとって、道具を作るのと同じくらい古くからある営みだよね。約二万年前とされるクロマニヨン人が描いた「ラスコーの壁画」は、その表れのひとつだ。

書かれた文字や、人から聞く話でしか物事を伝えられない時代には、見たことがないものの実際の姿については、想像するほかなかった。絵画も、実際の姿を写實的に描いたのではなく、それ自体、想像にもとづいて描かれたものも多かっただろうし、人びとが多くの絵画を自由に見られるわけでもなかった。ところが、写真や映像がやりとりされるようになると、かえって、想像力には出番がなくなってくる。産業的に大量生産されたイメージをあまりに大量に与えられすぎると、人間は自分でイメージをつくり出す力を次第に使わなくなっていくってしまうんだ。イメージの②が、かえってイメージの③という事態を生み出しているということなんだね。

こういう事態のことを、現代のフランスの哲学者、ベルナール・ステイグレルさんは、「象徴的貧困」ということばで呼びはじめました。この場合の「象徴」というのはシンボルのこと、ことばやイメージのことを指すと考えてください。

第1回の授業では、機械化によって人びとがものを作るノウハウを失っていったという話を話したよね。それに対して「象徴的貧困」というのは、シンボルがメディア・テクノロジーによって産業的につくり出されることで、人びとが自分で想像したり、ことばをつむいだり、自ら思考する力が、だんだんひからびてしまうことを指します。言ってみれば、想像したり考えたりする「ノウハウ」を、テクノロジーや文化産業に依存するようになったってことだね。

それを八〇年前に警告していたのが、精神分析学の生みの親であるフロイトです。彼は一九二九年の論文「文明のなかの居心地の悪さ」で次のように書いています。

人間は、言ってみれば、一種の補助具をつけた神——それをまともにはたしかに目覚ましいが、人間とともに成長したわけではなく、しばしば危難を人間に与える補助具をまとった神となった。

ちょっと難しいけど、このフロイトの言っている「補助具」というのは、テクノロジーやメディアのことだと考えてみてください。かつては想像するしかなかった遠くの場所の映像を送ってくれるメディアは、僕たちが想像をするための「補助」をしてくれているのだ、と考えることができる。手取り足取り、想像することの「ノウハウ」を教えてくれるということだ。そして、前回は話したように、人間はこれまでの人間の条件を超えて、まるで神様に近づいたように思える。

だけど、そういった機器は、必ずしも人間にフィットした形で、人間と一緒に発達してきたわけじゃない。だから、サイボーグみたいに僕たちと一体化したように思えるメディア機器は、同時に人間にとって異物でもあるんだ。そして、人間に「危難」——危うく難しい事態をしばしば引き起こす。

フロイトの時代よりもますます「補助具」が発達した現代では、「神」である僕たちの脳には、大量のイメージが毎日送り込まれてくる。そして、それに反比例するように、人間が何万年も前からもっていた、イメージをつくり出す力、想像力は弱まってしまっているんだね。

想像力の貧困は、イメージが過剰なことだけじゃなくて、たとえばテレビを通じて、みんなが同時に同じイメージを受け取っていることから生じている。どんなイメージも共有されているような世界では、あらゆるものが「あ、あれ

ね」「知ってる、知ってる」「もうわかってるよ」で済まされてしまうことになる。そこでは、それぞれの人がもつ単独性は失われて、みんなが、誰でもない、なんとなく「みんな」みたいな存在になってしまう。

想像力というのは、さっきの「広辞苑」の①の定義にあったように、「実際に経験していないことを、こうではないかとおしはかる」ものでもあります。

A 同じイメージを共有していても、他の人の経験やそのときの気持ちは、本当は見えていないんだ。でも想像して「おしはかる」ことで、僕たちは他の人の経験を分かち合い、ともに手をつなぐ場所を探ることができる。一緒にアイデアを出しあって、いろんなことを計画することだって可能だ。だけど、「全部わかってる」「どうせ同じでしょ」と言ってお互いの心のなかにある「世界」に想像をめぐらさなくなると、社会はつながる力を失い、¹「プレッシャー」に想像力には、他人を思いやることで、社会を成り立たせているという側面もあるわけだ。

そして B、人びとが誰も想像しなくなる時代がきたら、なにが起こると思う？ イメージを描けなくなり、他人を思いやれなくなるだけじゃないんだ。C それもとても重大な事態なんだけど、最終的には、その世界には「未来」がなくなってしまうんです。

「未来」というのはまだオトズれていない時のことだよ。未来の世界というのは、想像のなかにしかない。そして、想像力をつかって自分たちの世界や自分の人生の未来を思い描くことで、僕たちは新しいことを企て、実行していくエネルギーを得ている。だから、想像力とは、人びとの「未来」を成り立たせている「心のエネルギー資源」でもあるんだ。

でも、この「心のエネルギー資源」は、石油や天然ガスみたいな自然のエネルギー資源に限りがあるように、間違った状況に置かれると、湧き出てこなくなってしまう。この世界の未来を持続可能なものにするためにも、みんながそれぞれの想像力をいきいきとハッキリすることが、絶対に必要なんです。

大江健三郎という人を知っているよね。ノーベル文学賞を受賞した日本の小説家だ。大江さんは、君たちのような若い人たちのことを「新しい人」と呼び、

新しい世界をつくる希望を君たちに託している。そして、彼は、未来をつくり出す力を、やはり君たちの想像力に求めているんです。

(石田英敬「自分と未来のつくり方」)

(注) *ノウハウ……ものごとのやり方。

*フィット……うまく当てはまること。

問三 空欄 ① に当てはまる表現を次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 欲しがるようにしむけられたんだね
- イ 欲しいものが増えすぎたんだね
- ウ 欲しい気持ちがあまなくてなくなったんだね
- エ 欲しがれなくなったんだね

問四 空欄 ②・③ にそれぞれ当てはまる語を、文中から漢字二字で抜き出さなさい。

問一 傍線部イ・ホについて。カタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで記しなさい。

問二 空欄 A C に当てはまる語を次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア かえって イ もちろん ウ いくら
- エ やがて オ もし

問五 傍線部④について。「補助具」が「危難を人間に与える」とは、どういうことであると筆者はとらえていますか。文中の表現を用いて、三十文字以内で説明しなさい。

問六 傍線部⑤「そこ」が指し示す内容を文中から抜き出さなさい。

問七 次のア～エそれぞれについて、本文の内容に当てはまるものには○、当てはまらないものには×をつけなさい。

ア 太古の昔の絵画は、実物をすべて見ていながらも、写實的に描かれていないものばかりであった。

イ フロイトは、人間の能力を上回るような「補助具」の開発に疑念を抱き、警鐘を鳴らした。

ウ みんなが同じイメージや価値観を共有することで、互いに相手を理解し合える社会が成立する。

エ 「未来」をつくり続けるには、「心のエネルギー資源」である想像力をつかえるような状況が必要である。

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

三日前に雨が降り、水はけの悪い裏庭には、いつものように、あちらこちらに小さな水溜まりができていた。葡萄棚の下も同様だった。坂口は、持ってきた新聞紙に水溜まりの水を吸わせ、そのうえに、青いビニールシートを敷くことにした。ごみ袋もたくさん用意しておき、水を吸った新聞紙はそのなかへ入れて始末する。最初、説明し、やってみせてから、あとは生徒にまかせてみた。「どう？ 会場を設営するのも、一苦労でしょう？ イベントやるのって、大変ですけどすごく楽しいよ」

朗読前の思わぬ労働で、生徒たちは、頬を紅潮させている。そうしてジバンを整備したところに、青いシートを敷き、生徒を座らせた。葡萄棚の下には、ひんやりと小暗い、不思議な空間が広がっていた。蛇のようにのびたクキや変色した葉の隙間から、微妙な陽光が漏れ、生徒らの髪や制服に、小さな光の粒を飛び散らせている。①に向かう季節のなかで、かろうじて残った貧しい実が、照明器具のように吊り下がって、この空間を照らしていた。

「それじゃあ、朗読を始めようか。このあいだ言ったけど、自分の作品を読んでもいいんだよ」

あえてそんなふうに坂口が言うと、小さくキモイゼという声があがった。坂口の耳はそれを聞き逃さなかったが、聞こえないふりをして聞き流してしまう。自分の詩を読むというその行為に、生理的な恥ずかしさを感じるのだとすれば、それも理解できないことではない。キモイという言葉は好きになれなかったが、彼らの率直な反応だとも思う。そう、確かにキモイのかもしれない。詩なんてこっそり書くもので、こんなところで発表するものではない。わたしは秘密だった。詩を書くことは、それは悪事に等しいことだった。坂口は内心で、そうつぶやきながら、その恥ずかしさを突き破る生徒が出てきたら、それもおもしろいじゃないかと期待している。

ハ 朗読の順番は、前の晩作った、くじで決めた。こんなことひとつにも、わつとカンセイ^ニがあがり、場がモリ上がる。一番をひいた生徒がひやかされながら、西脇順三郎の詩を読んだ。

西脇はまだ教えていないが、生徒たちは、授業で取り上げた詩人に固執せず、案外自在に、好きな詩人の好きな一篇を探し出してきた。リチャード・ブローティガンの詩を見つけてきた生徒もいる。こちらも授業では扱ってはいないが、やさしい詩が多いので、とつきやすかったのだろう。そうして詩を探し出すというところから、すでに詩という行為が始まっている。坂口はそのことに気づいて、静かに感動していた。

どうして、この詩を選んだの？ と聞くと、生徒たちは、なんとなくとか、意味がわかって、とか、おもしろかったからとかしか答えない。それで、どうして、ではなく、どうやって、この詩に行き着いたのか、そのプロセスをたずねることにした。

図書館に行つて、なんとなく手に取ったという者、親に聞いたという者、「やさしい詩」というキーワードで、ググったという者、あるいは、アンソロジーのなかで見つけたとか、本に紹介されていたから、と言う者もいた。③それを聞くのも、「詩」であった。「詩」というものは、手でつかめないのだから、唯一、そこへ向かって歩いていく営みだけが、人間に許された「詩」なのではないか。そうも坂口は思っている。それくらい、坂口のなかには、詩を④

と思う考えがある。

坂口もまた、彼らと同じように、そうやって手探りで詩を読んできた。自分が中学生のころは、まわりに小説や詩の好きな同級生はいなかったし、両親も、文学にはまったく無関心な人々だったから、彼女はひとりぼっちで、本から本、詩から詩、詩人から詩人を紹介してもらって、手当たりしだいに読んできた。好きな詩人に行き当たるとうれしい。突き当たったら、それで終わりではなく、今度はその一篇から、詩人の全作品へ、全生涯へと、視野は限りなく広がっていく。⑤伴走者のいない孤独な読書の道のりだったが、坂口はすこしもさびしくはなかった。あのように、充実した読書の孤独を、生徒たちにも味わってほしい。

数人が過ぎたところで、いよいよ、ミナコの番がきた。彼女は、牧野虚太郎という詩人の詩を読んだ。いったい、どこで、こんな無名の詩人を見つけてき

たのか。死んでいるし、死んだのちにも、ほとんど人に知られていない。坂口は、ミナコにもまた、どうやって、この詩を見つけたのかを聞こうとして、なんとなくためらい、聞かずに終わった。そうやって、質問することで、生徒たちの秘密をこじあけていっているような気がしたからだった。

神の歌

水の悔恨がたへまない
いくへにも遠く 孤獨がえらばれて
にくたいが盗まれてゆく
ほのかに微風にもどり
かすかなもの 愛にうたせて
しづかに彫刻の肌をさめてゐた
たへて醜をくりかへし
神の
さぐれば かなしく
まねけば さすがにうなだれて

ミナコが読み終わると、しんとした。
意味わかんねえよ。

声変わりをする前の、甲高い男子生徒の声が鋭くあがる。みな、笑った。擲するような調子は意外にもなく、意味がわからなかったけれども、それでもなんだか、言葉の輝きのようなものに、みんながあてられているようなのが、坂口には面白かった。

ミナコはどんな野次にも平然として、笑うでもなく、がっかりするでもない。そんなものでしょう、という白い顔をしている。坂口は、写真機をもってきたことを思い出した。一枚、一枚、朗読する生徒を撮ってもよかった。ミナコから撮るのも不自然なので、個別の撮影はしないことにする。でも、あとで、み

んなを集めて、記念撮影をしようと思う。

へ 中 略

朗読会が終わりかけたころ、ようやくやって来た男子がいる。確か、井波、そう、井波だ。教室には、ときどきいるが、ほとんどいない。いてもまったくしゃべらない。だが存在感があるというか、背が同級生に比べてダントツに高いので、とても中学生には見えないのだ。

「どうしたの、井波くん。遅いわね」

「……」

井波にどうしたと聞くのは、ほとんど徒労だと坂口は思いながら、でもこの定番の質問は、坂口から井波にかけ、**「橋」**のようなものだから、はずすわけにはいかないと、思いついて聞き続ける。返事はない。(んなこと、どうだっていいだろうが。つるつせいな)という顔をしている。

「それで、何か読む詩を持ってきた？」

声は出ないが、かすかなうなずきがあつて、坂口はほっとし、身を乗り出す。井波は黒い詰め襟の制服を、片方の肩にかけ、白いワイシャツ一枚である。

寒くないのか。第二ボタンまで開けているので胸が見えるが、そこだけはまだ処女地のように白く、大人びた顔に似合わない。

「ええっと、みんな読んだかしら、読んだわよね」

全員に確認する。みな、無口にならずいて、唐突に現れた井波を見ている。

「さあ、やっぱりあなたが最後の朗読者よ、読んでくれる」

その場がさらに静まって、草を分ける風のように井波が前へ出た。そうして詩人の名前も告げず、もちろん、自分の名も名乗らず、いきなり数行の詩を讀み始めた。

しづかにきしれ四輪馬車、

ほのかに海はあかるみて、

麦は遠きにながれたり、

しづかにきしれ四輪馬車。

光る魚鳥の天景を、

また窓青き建築を、

しづかにきしれ四輪馬車。

どこからこれをつかんできたのか。

「サクタロウ！」

ミナコの声小さくあがつた。坂口にも、もちろん、井波にも聞こえたはずだ。そう、これは確か、朔太郎の詩だ。詩もいいけれど、井波の声がいい。ふと、この子は、どんな産声をあげて生まれてきたのかと思って、坂口は胸がいっぱいになった。

すでに声変わりをしていて、重いがらがら声だったが、坂口はその声に、静かな夜の波を思った。その波が、岸を打って、また海へと引き返していくところを想像した。井波の朗読はとてりズミカルで、言葉の輪郭が明瞭だった。彼の朗読が終わったあと、四輪馬車が声に運ばれ、宇宙の彼方へ走り行くのが見えた。

一つ、驚いたのは、井波が「四輪馬車」を「しりんばしゃ」と読んだことだ。坂口は、「よんりんばしゃ」と読んでいたから、最初、妙な違和感があった。しかし最後まで聞いてみると、「しりん」と読んだほうが、ずっといい。いいどころか、それが、きつと正しいのだ。しづかに、きしれ、しりん、ばしゃ。ああ、しの音がたくさん、入っている。自分の音の読み違えが、詩の本質の読み違えほどにも思われて、坂口は心の奥がかあつと恥ずかしくなった。そうして、それを言わずにはいられなくなった。

「あなたに教えてもらったわ。はるかしい。こんな歳になっても、読み間違いや勘違いを山ほどしてる。井波くん、ありがとう。しりんばしゃって、みんなあんまり、なじみのない音かもしれないけど、四つの輪の馬車と書くのよね」

坂口が確かめると、井波はうなずいた。

周りの生徒は、ミナコ以外、井波の読んだ詩をまったく知らなかったのだ、

坂口と井波がさつきから、まるで暗号をやとりするような会話をしていると思つて、二人のことを仲間同士のように感じながら、そのなかに入らず見つめていた。そう、同じ詩を知っている者は、もうそれだけで仲間なのだった。もつとも当事者同士には、その結びつきが、まだ見えていないというふうなのだった。

「ああ、とてもいい詩だね、これはほんとにいいね。短いけれど、絵が見えてくる。みんな、どう？ わたし、井波くんの声で聞いたこと、忘れないよ」

すこし感情が高ぶっているような坂口の口から、そんな言葉が発せられた。

実際、坂口は高ぶっていた。クラスのなかでは完全に浮いていて、行き場所もないようなこの井波が、詩を朗読した、そのあいだは、一人、確かに、そこに立っていた。みんなの目を集めながら。

(小池昌代「わたしたちはまだ、その場所を知らない」)

(注) *プロセス……経過。過程。

*ググった……インターネットで探し出すこと。

*アンソロジー……詩歌などを選び集めたもの。

*擲……からかうこと。

問一 傍線部イホのカタカナを漢字に直しなさい。

問二 空欄①に当てはまる語を漢字一字で答えなさい。

問三 傍線部②について。詩を書くことのどういうところが「悪事に等しい」ととらえているのですか。文中の言葉を用いて説明しなさい。

問四 傍線部③「それ」が指し示す内容を文中から二十五字以内で探し、最初と最後の五字を抜き出しなさい。

- ア 口語定型詩
- イ 口語自由詩
- ウ 文語定型詩
- エ 文語自由詩

問七 井波が読んだ「しづかにきしれ四輪馬車、……」の詩について。この詩の形式を次の中から選び、記号で答えなさい。

問五 空欄④に当てはまる語を次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 難解なもの
- イ 神聖なもの
- ウ 孤独なもの
- エ 自由なもの

問八 本文の内容に当てはまらないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 坂口は詩の朗読を通して、井波の中にある別の一面に気づくことができた。
- イ この詩の朗読会を成功させたことで、生徒たちは一つにまとまることができた。
- ウ ミナコが朗読した詩は難解だったが、生徒たちは言葉の魅力を感じたようだった。
- エ 葡萄棚の下で行われた朗読会は、さまざまな表現に触れる機会を生徒たちに与えた。

問六 傍線部⑤「伴走者のいない孤独な読書の道のり」とはどういうことですか。それを表している一文を文中から探し、最初の五字を抜き出しなさい。

受験番号
氏 名

得 点

小 計

—

小 計

二

問一	問二	問三	問四	問五	問六	問七	問八
イ	A		②			ア	
	B					イ	
ロ			③			ウ	
	C					エ	
れてハ							
てニ						ハ	
ホ						ニ	
して						りホ	
						かった	

最初

最後